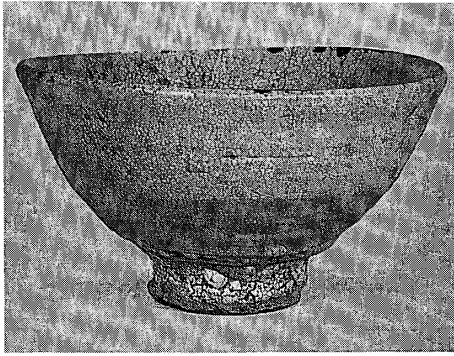


## 外 来 の 茶 陶 (1)

——「高麗物」と「阿蘭陀」——

木 村 弘 道(代表)



(高麗茶碗・大井戸)

(A)

和・敬・清・寂の茶道の理念を端的に行為にうつすものが茶事で、それは茶礼と食礼とを兼ねあわせて行なう儀式でもある。

その茶事には多くの道具類が用いられる。足利義政の時代、茶の湯の世界で広く用いられていたのは、いわゆる唐物といわれる主として中国産の諸道具であった。そのころ成立したと考えられる『君台観左右帳記』や今日に伝わる各種の『御飾書』がそれをよく示している。いかなれば唐物万能の茶の湯であったといえる。

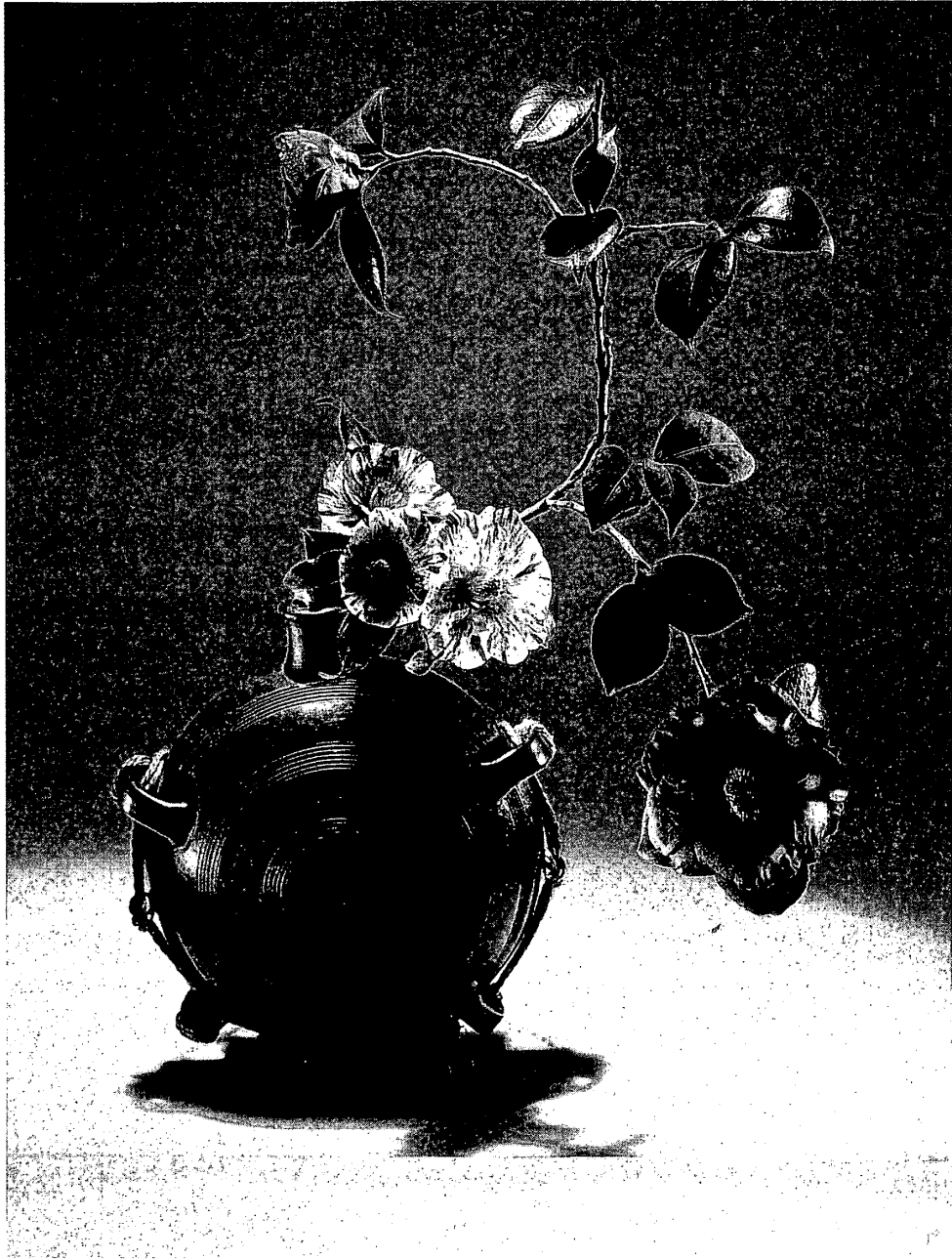
このように唐物を格別に尊重するようになったのは、茶の湯そのものが中国から伝わったというその成立事情によると考えられる。すなわち、我が国が古来より熱心に中国文化の摂取に努めてきた、その伝統の流れに乗って、茶の湯は禅宗と共に大陸文化の一環として受け入れられたのである。そしてその茶の湯の成立期である室町時代中期には、会所に多数の唐物が飾られ、そこで茶が飲まれた。茶の湯の世界は異国情緒豊かなものであった。

しかし、この「唐物へのあこがれ」による唐物偏重ともいうべき時代はそう長くは続かなかった。侘び茶が創始されこれによって替るからである。東山時代の書院台子の茶の湯から侘び茶に移行しはじめる早い例は、村田珠光が弟

子の古市播磨法師に宛てたといわれる茶の湯の伝書『珠光古市播磨法師宛一紙』にみられる。もっともこれは通称、珠光『心の文』とか『心の師』とよばれており、茶の湯の心得を書いたものであるが、これを通して当時の様子がよくうかがえる。短い重要な文章であるので全文を「『茶道古典全集』第三巻 淡交社 昭和35年」から引用しておこう。

此道、第一わろ(悪)き事ハ、心のかまんかしやう(我慢我執)也、こふ(功)者をはそねミ(嫉)、初心の者をハ見くた(下)す事、一段無勿躰事共也、こふしや(功者)にハちかつき(近付)て一言をもなけ(歎)き、又、初心の物をはいかにもそたつ(育)へき事也、此道の一大事ハ、和漢之さかい(境)をまぎ(紛)らかす事、肝要肝要、ようしん(用心)あるへき事也、又、當時、ひゑかる、(冷枯)と申て、初心の人躰かひせん(備前)物・しからき(信楽)物などをもちて、人もゆるさぬた(闌)けくらむ事、言語道断也、かる、(枯)と云事ハ、よき道具をもち、其あち(味)わひをよくしりて、心の下地によりてたけくらミて、後までひへやせ(冷瘦)てこそ面白くあるへき也、又、さハあれ共、一向かな(叶)ハぬ人躰ハ、道具にハからかふ(拘)へからず候也、いか様のてとり(手取)風情にても、なけ(歎)く所、肝要にて候、た、(唯)かまんかしやう(我慢我執)かわるき事にて候、又ハ、かまんなくてもならぬ道也、銘道ニいわく、  
心の師とハなれ、心を師とせされ、と古人もいわれし也

この文章で特に注目されるのは、唐物万能の時代にあつて「此道の一大事ハ、和漢之さかいをまきらかす事、肝要肝要、ようしんあるへき





事也、」<sup>①</sup>といひ、当時の唐物は美術品であるが和物には芸術的価値を認めない貴族的唐物主義の社会通念に珠光は盲従することなく、自分の目で和物の美を発見評価して、それを東山風の茶の湯の世界に持ち込んだ。つまり、唐物と和物をへだてる壁を打ち破り、両者の不当な差別を撤廃しようとしたのである。これは、唐物万能の、いわば東山風アカデミズムに対する大胆な挑戦といえる。なお、ここにでてくる「備前物」、「信楽物」云々の記事は、当時すでにそれらのものが茶の湯で用いられていたことを示しており、史料的にも重要な意義のある一文である。そこにはどうやら新たな美意識の発露をみることが出来る。侘び茶の萌芽である。

珠光によるこのような方向は、武野紹鷗を経て、千利休になるとより顕著なものとなる。それは、山上宗二が『山上宗二記』<sup>註①</sup>の中で「惣テ茶碗ハ唐茶碗スタリ、当世ハ高麗茶碗、今焼ノ茶碗乞也、形サへ能候へハ数奇道具也」と述べており、好みの推移がうかがえる。これまでの『御飾書』の茶にかわって侘び茶が主流を占めるに至ったのである。

しかし、注意しておかなければならないのは、唐物そのものと、これを多く用いる茶の湯がまったく打ちすてられてしまったわけではないということである。それは、侘び茶を主唱する千利休の高弟であった山上宗二が著したこの『山上宗二記』は、別に異本があり『茶器名物集』と呼ばれているように、「目利稽古ノ道」を問い窮めるための一書であり、その内容は「名物一種一種目明習」のための知識を書きつらねたもので、侘び茶が盛んで「唐茶碗」がすだれるような時期であったにもかかわらず、大部分を唐物の名とその形姿と伝来の説明に費している。そこには依然、唐物への伝統的なあこがれが生きていることがうかがえる。

このような時勢のなか、唐物と同じく、異国から舶載されたものであるが、侘び茶にかなう焼物があらわれた。高麗物がそれである。茶会記によれば、高麗物の出現は天文のはじめである。この頃は天目を中心とした唐物茶碗が圧倒的に頻繁に用いられていたが、その間に天目写

しの和物の茶碗や高麗茶碗があらわれ、高麗茶が漸時使用が増え、天正十五・六年を期に唐物は茶会記にそれほどあらわれなくなり、高麗茶碗と和物がかなりの数をしめるようになる。

では高麗物が何故それほど受け入れられたのであろう。いくつかの要因が考えられる。まず第一に侘び茶の隆盛にもとづく茶器の好みの変化や茶室の草体化があげられる。唐物の古典的な完璧なまでの美しさは、侘び茶にはどうもあわなと感じられたのであろう。それは、和物や高麗物のもつ非古典的不完全美の発見といってもよいが、『山上宗二記』の「珠光ノ云レシハ、藁屋ニ名馬繫タルカヨシト也。然則、麁相ナル座敷ニ名物置タルカ好シ。風体猶以テ面白也。」の言葉は甚だ示唆である。茶道では常に対比の妙と調和ということが重視されている。したがって、道具の取り合わせには気を配っている。

茶の湯の世界で高麗物が隆盛に至った、いま一つの重要な要因として、茶道入口の増大ということがあげられる。『御飾書』の茶、これはいうなれば足利将軍家と、これをとりまく人々の間にのみ行なわれた茶であったが、天文から天正年間の茶は、「山上宗二記」にも『其比、茶湯セザルモノ、人非人ト等シ。諸大名ハ不及云、下々、殊ニ南部・京・堺町人ニ至迄、茶湯専一トス。』と記されているように各層の人々の間に非常に広まった。これらの人たちにとっては、高麗物はかつての唐物と同様に異国からの舶来品であり、いよいよ進展いちじるしい侘び茶に使うことのできるものであった。高麗茶碗は大いにもてはやされることになった。

しかし、高麗物ははじめから茶器としてつくられたものではない。高麗茶碗輸入の初期のころは、朝鮮半島で日用雑器として焼造されたものの中から、茶味があり、茶の湯に用いることのできるものを取りあげてきたのであるが、やがて茶人たちの好みによる茶器の焼造を注文するようになる。そうして生まれたのが、いわゆる御所丸、伊羅保、彫三島、御本立鶴などの一連の茶碗であった。それは主として、文禄、慶長の役後、注文されたものといわれているが、詳細なことはほとんどわかっていない。以上は、

高麗物が侘び茶の発展とともに隆盛を極めるに至った、茶の湯の世界の概要の一端である。



(阿蘭陀色絵煙草  
葉文水指)

(B)

ところで、我が国は桃山時代に続いて、江戸時代の初めの鎖国に至るまでの約40年間は、活発に海外との商業活動を行っていた。貴重な品物が多数舶載され、その中には焼物も含まれていた。中国の青磁や染付、赤絵、朝鮮半島からは高麗茶碗、さらに南海諸地域の南蛮、島物、安南、交趾、宋胡録、それに呂宋壺や阿蘭陀などが当時の交易品の中にあつた。

ここいう「阿蘭陀」とは、オランダのやきものだけを指しているのではなく、我が国に伝世したヨーロッパのやきものの意である。

ポルトガル船がはじめて種子島に来たのは一五四三年のことで、やがてスペイン船が我が国に来航した。そしてポルトガルとスペインの日本における布教活動により、各地にキリシタン大名が生まれ、信徒も増加したが、豊臣秀吉はキリスト教が日本の封建社会の秩序を破壊することを恐れ、一五九六年キリシタン二十六名を捕え長崎で処刑し布教を禁止した。しかし、この半世紀の間にポルトガルやスペインの宣教師たちが、布教活動を通して各地にヨーロッパの文物をもたらした。その中には、やきものもあつたと思われる。

また、江戸時代の初頭には、オランダ人だけではなく、ポルトガル人、スペイン人、イギリス人の商人も平戸を中心に活躍していた。やがて鎖国になるが、こうしたヨーロッパの商人たちによっても、いろいろな機会にヨーロッパのやきものが日本に持ち込まれたであろう。しか

し、現存の「阿蘭陀」の大部分のものは、一六三九年の鎖国以来ヨーロッパの商人として唯一来航を許されていたオランダ東インド会社を通じて請来されたもので、こうしたことからヨーロッパのやきものを引括めて茶人たちは「阿蘭陀」と称したのである。したがって「阿蘭陀」にはいろいろのものがあるが、ヨーロッパのやきものは大きく三種に分類される。マヨリカまたはファイアンスといわれる陶器と、ストーンウェアすなわち炆器と磁器である。この中で、日本に来たのはマヨリカとファイアンスと若干のストーンウェアで、磁器はほとんど来なかつたようである。

それらの日本に伝存する「阿蘭陀」のほとんどすべてが、現在のところ確実な焼造年代も窯の場所も不明である。今後の講査や研究が待たれる。遠いヨーロッパからはるばる渡来したこのやきものを、茶人たちは早速、茶陶に見立てて茶事に用いている。その早い例は『伊達綱村茶会記』の「江戸邸茶会記」の元禄十四年六月十一日に「香合・阿蘭陀透」を用いた記録であろう。その後も「阿蘭陀」は多くの茶人に香合・香炉・菓子入・水指などとして盛んに用いられたようである。もっとも中には日本から注文した品もあるが、一見したところ派手なこの西洋のやきものに茶味を認め、茶事でこれをこなした茶人の器量は流石である。その器が茶陶として認められるか否かは、「高麗物」であろうが「阿蘭陀」であろうが、要は、それぞれの道具の取り合わせの妙を発揮できる茶味が、その器にそなわっているかどうかということを決るのである。

「阿蘭陀」を茶人や識者が注目すれば、当然陶工たちもこれを見逃す筈がない。「阿蘭陀」の影響を受けた陶工は二・三にとどまらない。その代表的陶工としては、まず尾形深省（乾山）と仁阿弥道八であろう。尾形深省は京焼の大成者といわれる野々村仁清の弟子で、陶土や釉薬の研究に熱心であったが、常に新しい意匠に腐心していた陶工で、明るい色彩と明快な意匠の異国情緒豊かなこの西洋陶器から多くのものを学び、さまざまな写しを試み、乾山焼の陶芸の

幅を広げた。乾山窯ではじめられたこの「阿蘭陀」写しは好評で、早速これを見倣っえ京都栗田口でもオランダ写しを焼造するようになり、いわゆる藍絵オランダ写しは、その後、京焼の中の特色ある作風の一つとなっている。一般に栗田口焼のオランダ写しや京オランダといわれるのがそれで、その源流は乾山窯に求めることができるのである。また仁阿弥道八は京焼の日本陶芸史上屈指の名工で、実に幅の広い陶技を持った器用な陶工であるが、彼もまた「阿蘭陀」写しの優れた作品を遺している。野村美術館の『和蘭陀浪絵細水指』は有名で、形姿や釉調は和蘭陀風であるが、和蘭陀にはない浪絵を描いて、しかも不自然さを感じさせないところに道八の「模」の意があるといわれる。これらの陶工の外にも青木木米はその『古器観図帖』に「紅毛水指」を載せており、尾形周平もまた西洋陶器の影響を受けた優れた作品を焼造している。さらに加賀の大樋焼の五代勘兵衛は名工の誉れ高いが、彼も「阿蘭陀」の『色絵白雁香合』の写しの傑作を数点遺している。『阿蘭陀』が日本の陶磁に与えた影響は案外大きく深いようである。

なお、図(1)は先年フランスのシャルトル大聖堂の近くのお店で買ったものであり、図(2)はオランダのボルスの酒瓶で、共に現代ヨーロッパの民窯の製品である。試みに花を活けてみたのがこの写真で、花は花芸安達流の安達瞳子主宰の作である。西洋の民窯の研究は、どうも、あまりされていないようであるが、本格的に調査をすれば、新しい西洋のもっと優れた茶陶がみつかるかもしれない。

註①『山上宗二記』には、諸本があり多少の異同があるので引用文はすべて、桑田忠親著『山上宗二記の研究』 河原書店 昭和32年によった。

一昭和61年度金沢美術工芸大学共同研究報告一  
(平成元年10月16日受理)